

第24回アクラスZOOM寺子屋「感想」

大変勉強になりました。ジャーナリストで(も)ある玉置さんが入ることのメリット・デメリット(もう少し強い言葉で言えば功罪)はいろいろとあると思いますが、日本全体で起きていることにつながる、様々な現場に参考になるお話だと感じました。もし他の地域に移られることになっても、大阪にずっといらっしゃる場合にも、ぜひ発信を続けていただければ幸いです。ありがとうございました。

著作、本日のご講和からたくさんのお話をいただきありがとうございました。
本日は感想というよりも、いくつかの質問という形に変えて記載させていただきます。

■今までのところで玉置さんは「伝え手」から出発し、「居場所の作り手」にもなり、今は兩岸を行き来しながら複眼的に過ごされていらっしゃいますが、今後、また別の側面の「担い手」になりたいというご希望はございますか。もしあればどこを「担われたい」のか伺ってみたいかったです。(それはまた次回の著作につながるのかもしれない)

■集住地域に生きている子供たちの場にやってくる「散在地域からの子供たち」のお話がありました。本日のお話では、その差について触れられていましたが、この両者はその出会いの場所で互いにどのようなことを学び合っていると玉置さんご自身は感じていらっしゃいますか。

■今は日本人が居場所を作り出そうとごている段階の日本の社会(正確にはそのように考えられがちな社会)ですが(特に年齢層の高い層が多く主導権を握っているところも多いと思います)、ロンドンでご自身が経験なさったように、日本も「自分らしく居場所を獲得した人たち」が他の誰かのために、日本という社会とうまく融合する居場所を生み出したり、舵取りをメインでしていく。それが当たり前になる世の中の訪れは2024年というここから加速していくとお感じになっていらっしゃいますか。またそうだとした場合、その兆しは新聞記者の玉置さんの目にはどう映っていらっしゃいますか。

■先の学びの場にロンドンを選ばれたとのことでしたが、その学びを終えられ、それを踏まえた今を過ごされている玉置さんご自身が、現在意識して情報を追っていらっしゃる国・地域がございましたら、お教えいただければ幸いです。

本当は参加した会の中で、玉置さんご自身の言葉でたくさんお伺いしたのですが、時間の制限のある中では難しいと感じましたので、この感想の場を利用して、書かせていただきました。

この4点は「今時点の玉置さんご自身の言葉」で、もう少し具体的にお伺いしたかったことでした。本日はどうもありがとうございました。

末尾になりましたが、これからの育休が素敵なお時間になりますように☆彡

自尊感情・自己肯定感の大切さと一個人として対等に学習者に接することを学びました。また、貴重なお話を聞けて良かったです。ありがとうございます。

玉置さんのお話の中で、「個人として見る」という言葉がとても印象に残っています。つつい、支援している子どものことをステレオタイプ的に見てしまうときがあります。「個人」として見て、その子の良い面を見つけていこうと改めて思いました。また、参加者の方々の話からも学ぶことが多かったです。「網目の中に居場所をつくる」「360度から個人を見る」という言葉を忘れずに活動していこうと思います。最後に玉置さんがおっしゃった「支える人同士がつながることが、支える人のケアになる」という言葉に救われました。ありがとうございました。

これは、本の感想になってしまうのですが…私は1999年にイギリスのイーストクロイドンにあるセカンダリースクールで、日本文化を紹介するボランティア活動していました。移民の子が多い学校で、当時は理解できていませんでしたが、第二言語としての英語教育や入り込み授業も行われていたと思います。コソボからの難民の子もいると聞きました。ネイティブが職場で話す英語が全くわからず、周りで何が起きているか殆んど理解できていませんでしたので、玉置さんの本の4章を読みながら当時自分の周りで起こっていたことを想像することができました。また、マイノリティとして存在していた感覚も思い出すことができました。

地域日本語教育がボランティアによって支えられている状況の問題性がよく、日本語教育の状況について枕詞のように語られ、それがともするとボランティアの意味を軽視する状況につながっていると思います。確かに、日本語教育という専門性が職能として社会的な認知を獲得し、日本語教師が職業として成立する状況をどう作るかは、実質的に移民国家となっているこの国の状況において、極めて重要な課題であると思います。

同時に、ボランティアという存在が、「教える人—教えられる人」の関係ではなく、同じ地域の住民の交流の場である地域日本語教室を支えるものとして、この移民社会を民主的なものとして形成する上で、極めて重要な存在であるということを明確に示したことが、何よりも玉置さんの著書の意義だと私は考えています。

前者の問題について言えば、国や自治体の施策が現状において極めて不十分であることはもう言い尽くされていることですし、今、国は、激しく政策を動かしていることも周知の状況の中で、「層としての日本語教師」が、この制度変革の時代において、いかにイニシアティブをもって、「子どもの日本語教育の保障」を勝ち取るかということが、要請されている政治テーマだと私は考えています。

ご著書では、教科教育の専門性は語られていても、年少者日本語教育の専門性は登場しない。では、そういうものがこの国ではないのかということ、そうではない。国におけるJSLカリキュラムの策定、バイリンガリズムの研究実践など、外国ルーツの子どもたちについての、研究・実践は存在します。

一つには、大阪では、公教育にそれが委ねられてしまっているという状況があるのかなと玉置さんの話を聞いて思いました。

確かに、自治体によって、制度的施策はバラバラな状況で、大阪はその先進地だと思います。では、大阪における公教育におけるその内実に課題はないのか。私は、自分自身が垣間見た状況からも、まったくそうは考えていません。

地域における実践も、公教育も、バイリンガリズムの実践研究も、他者に委ねて切れてしまうのではなく、切り結び合いながらクオリティをあげていくことが求められているのだと私は考えています。そういう点では、日本語教師養成課程においては取り上げられておらず、日本語学校で留学生に教えることとは全く異なる、地域の日本語教育の課題、年少者日本語教育の課題について、層としての日本語教師が学ぶ直す仕組みを作ることが絶対に必要だと私は考えています。

今日の玉置さんのお話をお聞きして、日本における移民の子供たちが抱える問題が大きく深刻であるかを実感しました。外国人が日本になじんでいくためには、日本語の習得が大きなキーになると思います。しかしながら移民の子供たちは母語習得が十分でないことも珍しくなく、まずは自信とつけながら自分のアイデンティティーを確立していく必要があると感じました。支援者は何ができるのか、という問いに対して、子供のアイデンティティーを確立するお手伝いをする、ということではないかと思いました。また、支援者の意識として大切なことは、「助けてあげる」のではなく、あくまで「共生していく」ための活動であるということ認識することではないかと思いません。ありがとうございました。

玉置さんの支援されている現場のお話を聞いて、非常に柔軟でゆるやかな場だと感じ、そのおおらかさが今後の子どもの支援では大切なのではないかと思いました。学校現場ではどうしても「こうしなければ」「こうあるべき」「他の子と同じように」という意識が働いてしまい、1人ひとりをしっかり見ることが難しくなっています。昨日のお話から、日本語教育を広く大きい視点からとらえ直すことができたと同時に、自身の現場にも生かせるヒントをたくさんいただきました。ありがとうございました。

著書「移民の子どもの隣に座る」を読んだ時から関心を持っていた玉置さんと直接お話する機会を得て、とても有意義な時間でした。ご家族の思いや将来の仕事との兼ね合いなど、かなり立ち入ったことまでお尋ねしたのに、率直にお答えいただき、ありがとうございました。全体的に言えることですが、玉置さんは深く広い経験をなさっているのに、あまり気負うことなく飄々とお話しになっていたことが、逆に自信を感じました。

お話を聞いて感じたのは、行政や学校の対応、父母の境遇など、子どもたちを取り巻く環境が地域によって大きく異なることです。例えば高校進学を巡る懸案に関しても、他の地域での経験が必ずしも他の地域でそのまま当てはまるわけではない、ということに改めて思い当たりました。

一方で地域や子どもの年齢を超えて共通する要素がたくさんあることにも気づきました。例えば、〇〇人としてではなく個人として向かい合うこと、自尊感情を育てること、子どもと互いに学び合う姿勢を持つこと——などです。

玉置さんや嶋田先生、他の参加者の方と意見を交わしながら、自分の知見を深めることが出来たのでは、と感じています。玉置さんのさらなるご活躍をお祈りするとともに、私自身もまた自分の持ち場で頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

今回、直接玉置さんのお話を聞くことができ、Minami子ども教室と、私に関わる杉並の子ども日本語教室とは、少し性質が違うところもあるが、たくさんの学びと気づきをいただくことができた。心より感謝したいと思う。

〈ボランティアについて〉

中でも印象に残ったのは、ボランティアは「支援教室」という「コミュニティ」の一員であるということ。「支援」という一方的なものでは決してなく、互いに得るものがある。

確かに私自身、子ども日本語教室に関わっていなかったら、彼らの存在、彼らのおかれている環境や背景、そして「しんどさ」に目を向け続けることはなかっただろう。

「週1回の支援でできることは限られている」とした上で、「あきらめずにやっていく」こと。そして、なにより大切にしていることとして、子どもをほめる、そのほめ方も上からではなく対等に。教えてもらうこともある。なに人ではなく一個人として見る。ルーツを蔑む子どもがルーツについて話す言葉に耳を傾ける。

いろいろな子どもが集まり、いろいろな大人が「よってたかって」関わることで、厚い層ができるのではないか。ボランティアもいろいろな人がいるからいいのだ。

さらには、いつも同じ人に支援してもらうこともよいが、いろいろな人に接してもらうことの良さもある。Minamiでは学生ボランティアも多く、回転が速いという。マッチングはその都度決めているそう。それも持続可能なために必要な形かもしれない。

〈連携について〉

大阪市中央区では、Minami子ども教室ができて10年の間に、子ども食堂や学習支援、居場所などの団体が立ち上がり、「子どもの居場所連絡会」でつながっているという。区や社協、さらに弁護士会まで連携しているのは素晴らしいとしか言えない。子ども達はその「網の目」のどこかに引っ掛かり、居場所を作れるようにと、分厚い連携が感じられた。

子どもの学習支援では、駆け出しの私たちも、将来このような形に育っていったらと思う。

この度は大変貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

大変興味深く、そして共感できるお話がたくさんあり有意義な時間でした。特に「居場所」としての教室というのは外国ルーツの子どもたちにとって大きな意義があるということ、日々の実践から常々考えています。それは地域でも学校内の日本語教室も同じでなんだなぁと気づきました。子どもたちが安心していられる場所があるというのは、心の安全につながるのだと改めて実感しました。

印象に残ったお話は、教室で成長していった子どもたちが大きくなって、ボランティアとして教室に戻ってきて「ロールモデル」になっているということでした。その子たちにインタビューしてみたい！と思うぐらい、とても感動しました。その子たちにとって、Minami教室がどれだけ大きな存在かを考えさせられるお話でした。

玉置さんの本、ぜひ書きたいと思います。

貴重なお話、ありがとうございました。

寺子屋に参加して、その時に玉置さんのお話やブレイクアウトの話し合いで感じたことも多々あるのですが、もう一度「移民の子どもの隣に座る」を読みましたので、書籍に関する感想を書きます。

・他の出席者の方も「刺さった」「これですね」とおっしゃっていた素敵なタイトル『移民の子どもの隣に座る』

私が日本語のボランティアを始めた30年前、「正しい日本語」を教えなければならないと必死になっていましたが、特に海外ルーツを持つ子どもの場合、ほんとに教えようと構えてはいけないことを思い出させてくださいました。

・「支援する」多くの事例と記者の葛藤

きっと読むたびに発見があると思います。学習の支援に留まらない子どもたちとの関係性、それを記事する記者のポジショナリティーは理念に基づいているわけでもなく、決まった形を持っているわけでもないの、読者それぞれにとっても見方は変わってくると思います。また、集住地域といっても静岡・愛知のような製造業の盛んな地域と、本で少し垣間見たミナミでは、全く施策も、支援のあり方も異なっているように思いました。さらに私が暮らす静岡県東部は、日本語教師の私にとっては外国人がいる風景は当たり前なのに、散在地域と言われ地域社会の片隅の出来事です。

・10年の重み

静岡県三島市を本拠地とする教室も今年、10年目を迎えました、「Minamiこども教室」とはまったく違う歩みに思えます。それでも市議やマスコミ、研究者にとっては「訪問すべき場所」になっています。義務教育でもなく、市民権もない海外ルーツの子どものことを社会に伝えていくのも支援者の役割だと気がつきました。子どもたちが社会で逞しく生きていけるようにするだけでなく、マジョリティの考えを変えていくのも大切な役割だと思います。

支援で入っている教室で、ある程度日本語ができるようになった生徒には、定期テスト対策や受験対策が中心になっており、これでいいのか？生徒に寄り添っているのか？という悩みを抱えて受講しました。

玉置さんからは、自身がボランティアされている教室でも、宿題のお手伝いが中心であり、指導の合間に近況を聞いたり、困りごとを聞いたりして、それだけでも寄り添っているのではないかとお話しいただきました。お話をうかがって、少しほっとしました。何かもっと特別なことをしなくては、と少し気張っていたと気づきました。

また、玉置さんのお話に、支援者に対してのケアや結びつきも大切ではないかというものもありました。コロナの頃に日本語ボランティアをしていたことを思い出し、支援者同士のつながりがなく、困りごとを共有する場がなく、数ヶ月でやめてしまったことを思い出していました。コロナの最もひどい時期だったので、仕方がなかったのですが、支援者にとっても、居心地のいい場所作りは大切です。

嶋田先生、玉置さん、このような貴重なお話をうかがう機会を作っていただき、ありがとうございました。

玉置さんをはじめ、参加者の皆さんが移民の子どもたちに寄り添う、熱く温かい支援活動をされていて、まだまだこういった活動は続いていくものだし、もっと広がってほしいとの思いを強くしました。その反面、少子化や若者の貧困化などを考えると、支援活動をする側の若い担い手が先細りになってしまうのではないかと案じています。海外のように支援のための十分な財源を確保すること、しっかりとした支援体制を整えること、日本語を教える人たちがしっかり”メシを食える”ようになることが必要不可欠だと思いました。

まず他の方も発言していたように教室で日本語教育が軽視されていると感じました。日本語教育のとらえ方が初級のテキストで日本語を教えるという部分にのみあると思われていて、むしろ中級以降の教科との連携に日本語教師の専門性が生かせるのではないかと歯がゆさを感じました

一方、今回自身のテーマとして「外国人支援の現場でなぜ日本語教師の専門性が生かされないのか」という点については、答えは出せませんでした。教師という存在が「隣に座る」という支援の本質とは相反するものがあるのではないかということを感じました。

私自身思うところがあり10年ほど前にEPA看護師介護福祉士の相談窓口を立ち上げ、どんなことがあっても「絶対に手を離さない」という支援を数年間ではありますが意固地に続けていました。 コロナを機にそのような「手を離さない」外国人支援とは距離を置いています。その当時の経験から外国人の数だけ背景が違う問題があり、地方で外国人の中でも多数派ではない国であれば、日本社会からの支援はほとんど期待できず、自力で問題を解決する（あるいは解決できず帰国や失踪をする）しかないと感じました。

今後日本語教育に何ができるのか（あるいは何ができないのか）をもう一度自身の立場（日本語教師、外国人支援者、移民にルーツを持つ子供の父）から考え直してみたいです。

玉置様、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

この度は玉置さんの長年のボランティア経験によるお話を直接伺うことができ、有意義な時間になりました。玉置さんのお話から子ども日本語教室が子どもたちの居場所として長く存在することが、地域の信頼を得て、地域で繋がり、子どもたちの支援の可能性が広がるとわかりました。杉並区子ども日本語教室は始めて1年半の若い教室です。子供たちの居場所、日本語学習の場所として、人の流動はありながらも持続可能な運営、環境づくりを焦らず長い目で取り組んでいきたいと思いました。

この本を初めて読んだ時は、外国にルーツのある子供たちの置かれる状況や増加の背景など知らない事ばかりで、今の仕事に知識と知恵を得ることができるよい本に出会えたと思いました。その後、子ども日本語教室の事務局として日々起こる大小さまざまな出来事に試行錯誤で接してきました。

寺子屋ZOOMの参加を前に久しぶりに本を読み返してみたところ、私がこの間に接してきた事へのヒントにつながる事例や、現在教室で感じている事との共通点、共感点が書かれている箇所新たに目が止まりました。読む時々で気づきを見出すことができる、まさにバイブルのような本だと思いました。今後も読み返していきたいと思えます。

玉置さんの取材と発信が私たちの視野を広げる糧となります。これからも玉置さんの活動を応援しています。ありがとうございました。

玉置さんの『移民の子どもの隣に座る』を読んで&お話を聞いて

お話を聞いて心に残ったことばはいっぱいあります。なかでも「私自身が変わった」ということばはもっともいいなと思いました。

島之内のミナミ子ども教室＝居場所＝空間＝尊重し合える場は理想（ほんとは本来の姿なのですけど）です。関わられているみなさんの考え方が反映され、造ってこられたこそある「場」なんですね。

日本のそれぞれの地域でもそれぞれ変わっていかなければならない、そのために「そうだ」と思ってもらえる人とつながって、広げていかなければならないです。

本の「プロローグ」p.16で「多様性」「多文化共生」という言葉について、「『多様性』や『多文化共生』という言葉を目にするようになった。そうした言葉が人の口の上れば上るほど、おざなりに『マイノリティへの配慮』を示すための便利な決まり文句として用いられることが増えたように感じる。『多様性』という言葉がむしろ、その背景にある一人ひとりの顔を、語り、人生の歩みを、覆い隠すようになってはいないだろうか。」この文章はとても響きました。これらのことばを使っていると気付かないうちに「違う」ということを無意識のうちに潜在化させて区別や差別につなげていっているようにさえも感じます。改めてこれらの言葉を使うことに注意が必要だと思っています。

追記：話を聞いた翌々日7/5「だから、ここで生きていく～共生のとりで 大阪・生野」NHKの関西熱視線、という番組がありました（見逃し配信あるのですが、関西以外の方は見られないのかも？です）。玉置さんのお話のなかであった、1対1で向き合っただけの重要性は「ああ、そういうことなんだ」とよくわかりました。

玉置さん、「Minami子ども教室」をはじめ、玉置さんの活動の日々を直接お聞かせくださりありがとうございました。どこに住んでいても、変わらぬ思いを持ち続け行動されている玉置さんのお話をうかがえたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。「隣に座る」ことは、そう簡単にはいきませんね。ただ座るのではなく、一人ひとりの顔を見て、かかわって、一緒に考えて、いっしょに感じ合う・・・玉置さんが過ごしてきている日々が、ともに生きているということなのだと感じることができました。私のやっていることなど、まだお題目に過ぎないです。これからもずっと考え続け、かかわり続け、一人ひとりと向き合いながら自分のできることを続けていこうと思いました。機会をくださった嶋田先生、ありがとうございました。

日本語教師として学習者と向き合うとき、自分の行なっていることが未熟であっても、学習者のライフに直接、影響を与えることがあるのだと気づいたことがあった。それは、かつての学習者が卒業後に私のもとを訪れ、自身の振り返りを語ってくれたときである。

「その子の今の暮らしに、また別の居場所が見つかることを心から願う。」玉置氏が移民の子供たちと実際に机を並べ、共に在ることから生まれたことばに、私は「痛みと希望」を感じる。

そして玉置氏は「ただ、今は思う。その子の長い人生のその瞬間、多感で、ぐんぐん成長しているその時期、教室で一緒に過ごす時間があっただけのことには、どれほど小さくても、なにがしかの意味があるはずだ。それだけでもいい。」と述べる。

玉置氏のこの眼差しのように、「いま、ここ」を大切に、私も共に在る誰かの席を、あけておきたいと思う。

著書を拝読した段階では、島之内には様々な支援があると思いましたが、他の地域では更に多くの団体があるとお聞きし、グループで話し合った「網の目の中に居場所をつくる。そのために、まず自分が網を作る側になる。また、本人もそうなれる機会を作る」という流れがまさに体现されているのだと思いました。また、子どもたちにとっての「社会」はほぼ学校とイコールなので、学校以外の場所の存在は大きいです。子どもたちが安心して継続的に来られるような居場所にするため、工夫されている様子を日本国内外の写真とともにお聞きすることができ、大変貴重な機会となりました。

大変勉強になりました。ありがとうございました。

「ボランティア」という存在やその意義、または継続的に人が集まる場というものにはどんな条件があるのかなど、考えてみたいと思いました。

外国にルーツを持つ児童生徒の様子や、取り組みについて詳しく伺うことができ、とても勉強になりました。集住地域の場合は、このように実際に問題が生じることもあり、自治体としての取り組みや、民間での取り組みが進められていることは素晴らしいと感じました。反面、散財地域の場合は「外国にルーツを持つ児童生徒は殆どいない方大丈夫」と言った理解もあり、今後の課題ではないかと感じています。

また、なぜかはわかりませんが、日本語教師とボランティアの方との溝がある気がしています。強化などの指導ももちろん大切なのですが、そこに日本語教師に知識をうまくいかせる方法はないのか、地域にある日本語学校との連携なども含めて、今後の課題として取り組んで消えたらと改めて感じました。

今回も素晴らしい学びの場を提供いただき、本当にありがとうございました！

今回もまた興味深い学びの機会をいただきまして嶋田先生と玉置さんに心から感謝します。たくさんの学びの中で特に印象的だったことが3つあります。まずプレゼンテーション力のすばらしさに、'さすが現職の朝日新聞社記者'と感嘆しました。パワーポイントの展開の仕方や写真や新聞記事の提示の仕方、また説明する時の洗練した表現が歯切れよく伝えたい事柄が的確に入ってきました。寺子屋が始まる前から「移民の子ども横に座る」というタイトルに魅かれており、玉置氏の大阪ミナミの移民の子どもたちを中心とした'教室'での、たゆまない、そしてダイナミックな活動を緻密に取材し記事にし、世に周知させる営みは非常に価値のあるものだと思います。

現在、私は英語を中心に教えていますが、学生たちにプレゼンテーションをさせる際、'Using a personal anecdote to help us feel more connected to the presenter'というヒントをいつも与えています。その意味から玉置氏が個人的な経験とストーリーを全面的に打ち出してきたものは圧倒的な強さを持っていましたし、同時に感心したのは受け手側のanecdoteを揺さぶる普遍性を他者にもたらしたことにあります。例えば、私自身、山梨県という狭い地域で日本語教育に関わった時の様々な出来事やドラマが想起されて皆さんとその経験を分かち合いたいと純粋に思いがこみ上げてきたことです。大阪のミナミという移民の集住地域と散在地域の比較や共通する課題についても考えさせられました。

次に興味深かったのは、玉置氏が観察した彼らの課題の一つとして、'自尊感情の低い子が多い'という現状です。これは私の経験上でも同様な傾向が見られ、ずっと気がかかっていたことです。彼らの多くが自分のルーツを蔑んでいる様子が見受けられました。ここから彼らへの寄り添いやサポートとして'ほめる'とか'傾聴'というキーワードが出てくるのでしょうか。高校の取り出し授業で教えた生徒たちは、私がどんなに頼んでも決して母語を話してくれませんでした。ここには日本という国の'他'や'異なるもの'へのnegativeで排他的な思考回路が悪影響を与えていることもあると思われます。日本語どころか母語を鮮やかに操る能力を持っているのに日本という磁場ではマイナスに作用することも多々あることを彼らは生きるための本能として気づいているのではないかとよく思いました。そういう意味で自分の生徒たちには日本という狭い、一つの国を中心に捉えずglobal personとして生きることを考えてほしいと訴え続けてきましたが現実には厳しいように思います。

そこで私のアメリカでの経験が思い出されたのです。大学でESLのteachingの授業をとっていたのですが扱ったテキストの1章に書かれていたのは、世界中から来た外国人が英語のレッスンを受ける前に全員が円座になり、一人一人自国の言葉であいさつや簡単なコメントをシェアしていくという活動でした。これは自国の文化や言葉をrespectするという、人間としての基本的な心構えを確認する大切な活動として紹介されていました。くしくもアメリカで日本語を教える時、直接法主流で、少しでも他言語が混じると怠慢だと注意されることがあったのですが、そこに？マークがついた瞬間でした。言語が文化であり、それはつまり人間を丸ごと表すものであると考えた時、言語が人の口から記号のように発せられるのではなく、人間の魂が口と言う器官を通して表されるなら母語がいかに大切なものであるかを常に誇りを持ちながら言語と向き合う姿勢を作っていく必要があるのではないかと—そういう意味において、では、日本はそのような土壌形成が用意されているのだろうか、という？マークもまた抱き続けて久しいです。

3つ目は'子どもたち'の横に座った時、どのように彼らを捉え、どのように接し、どのように伴走していくのか、について深い思慮をもつべきであるということです。ずいぶん前になってしまいましたが、2012年6月のアクラスの勉強会で、早稲田大学の川上郁雄先生が上梓された「移動する子どもたち」についてのコメントをアーカイブにレポートさせていただいたことがあります。移民問題にかかわる子供心と言語教育問題を取り上げたテーマでした。さまざまな背景を持って他国へ移動してきた人々の多様な生活やドラマがあり、それはそれで興味深いストーリーです。しかし、子供に視点を当ててみた時、彼らは親とは違って彼らの意志で移動したのではないという非常に重要なポイントに気づかされます。中学校や高校で取り出し授業を受け持った時、もう一人の先生は国語の先生でした。彼女はいつも外国籍の生徒たちが日本の詩や俳句や短歌、また日本独特なお話への理解力が低いことから判断し彼らの日本語能力の低さを嘆いていました。いわゆる日本独自のものを日本人の子どもたちと同じように感じ、理解しなければ評価しないという空気がありました。そういう物差しが本当に腹立たしかったことを思い出します。彼らの論説文の理解力はいかに素晴らしいか、そういう授業は与えないので分からないわけです。なぜならば、日本の子どもたちは日本昔話や詩などと親しみ、論説文などはかなり高学年になり抽象概念が理解できるようになってから学ぶという順序を周到するからでしょう。また県在住の外国人たちに県内の日本語教員を目指す大学生たちが集まって話しながら教えるワークショップがありました。活動後のFeedbackで学生たちの多くが、どのように'教えたら～'、など'教える'という言葉を繰り出しており、非常に違和感を覚えたものです。そこには言語伝達の一方方向性しか見えないからです。彼らの心にはもちろん日本にいて不自由な日本語をもっと習得したいという気持ちがあるわけですが、その前に一人の人間としての相互のやり取りから出発したいという思いがあるのではないのでしょうか。その意識のあるなしが彼らの横に座った時、positiveなエネルギーとなって生きた人間が使うものとして言語(たとえば日本語)を獲得していきたいという姿勢につながっていく可能性があると思います。

最後に、パワーポイントの中に玉置氏が書かれた新聞記事があり、その中に、「異和共生」という言葉がありました。共生社会という言葉をよく目にしますが、いわゆる多様性、diversityの真の実現とは何なのか、「異和共生」という響きは再考のヒントを与えてくれそうに感じました。今回の学びの機会に感謝いたします。ありがとうございました。

玉置さんが活動している「Minamiこども教室」は、悲しい事件をきっかけに2013年に発足した。「学習支援」より子供達が安心して過ごせる「居場所」としての役割を大切にしてきたという。子供達の寂しい気持ちに寄り添い、教室での学びは「一対一」を目指す。行政、学校、地域が連携し、小中高生～大人まで、幅広い層のボランティアが支えている。

教室を卒業した子供達がボランティアとして支える側に成長しているのが素晴らしい。同じ境遇で育ったお兄さん、お姉さんが「ローモデル」となり、子供達の生きる力となっている。

教室では「自分で簡単なものが作れるように」と調理実習も行う。普段、お金だけ渡され、自分で食べ物を買うことが少ない子供達にとって、「料理ができること」は生きるために必要なことなのだ。また、大学に上がることを想定しづらい家庭の子供達のために「キャンパスツアー」も開く。イベントの一つ一つが「生きる術」や「生きる希望」につながっていることに驚いた。

教室の子供達は「基礎学力」も「日本語学習」も遅れている。そのため、「自尊感情が低く」、自暴自棄になりやすい。そんな子供達に「自分達でもできるかもしれない」と思ってもらうために、玉置さんは「褒めること」を意識的にされている。間違えても「惜しい!」と言葉をかける。決してわざとらしくない褒め方で。しかも、「対等な関係」で。

子供達の「母語」や「文化」も大切にし、興味を持って子供達に話を聞いているのも素晴らしい。大人が子供達に何かを教えるという一方的なものではなく、この教室に集まる子供達と玉置さんには日常的に「学び合い」がある。玉置さんの「子供への向き合い方」には、学ぶべき点が数多くあり、胸が熱くなった。